

Title	空間論的転回について：時間表象の單一性と空間表象の複数性に則して
Sub Title	A study on the spatial turn : in relation to the singleness of the representation of time and the plurality of the representation of space
Author	福田, 光弘(Fukuda, Mitsuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.), p.63- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

空間論的転回について

——時間表象の單一性と空間表象の複数性に則して——

A Study on the Spatial Turn:

—In relation to the singleness of the representation of time and the plurality of the representation of space—

福 田 光 弘*

Mitsuhiro Fukuda

This thesis intends to explain the characteristic of the spatial turn from three points. First, it refers to the character of the modern space as product of the modern capitalism. Second, it exposes that the clock-time is the means of the production of the modern space. Third, it elucidates that the mode of recognition is also produced by the modern capitalism just as the modern space is produced. The key note of these explanations is the difference between the singleness of the representation of time and the plurality of that of space. These three points are the main topics of Lefebvre's spatial dialectic, and critical geographers who began to advance the spatial turn and recognize his influence. Therefore this thesis develops mainly in the introducing Lefebvre's novelty and the way critical geographers accepted it by treating these three points. By so doing, this thesis aims to contribute towards the clear interpretation of the characteristic and complicated meaning of Lefebvre's spatial dialectic.

1. はじめに

本論は空間論的転回という、英米圏における「批判地理学」やそれに準ずる都市研究の中で強調される思想傾向を考察する。それによりこの転回はいかなる実体上の変化に対応するものであったか、そしてこの転回はどのような以前と異なる問題圏を導くものであったかを検討する。特に以上のことを、批判地理学にたずさわる人々が理論的な支柱としてきた H. ルフェーヴルの空間論から行うのが、本論の大まかな内容である。

こうすると本論で論じられる空間論的転回とは、ルフェーヴルの理論の全面的受容に他ならないのではないか、という疑問が出てこよう。様々な論者ごとに空間論的転回に関する意見は異なる。さらに、昨今の批判地理学の取り組みは、彼の最晩年期に重なるものの、1991 年の彼の死後にも続いている。それではなぜ敢てルフェーヴルに空間論的転回についての理論的支柱を求めるのか。それは空間論的転回が、空間を介して作用する近代資本主義生産様式のプロジェクトの強力さを把握することに焦点を当てているためである。そしてそれこそが、ルフェーヴル空間論・都市論のもっとも先駆的・包括的な論

* 慶應義塾大学大学院博士課程（都市社会学 社会理論）

点である。

ルフェーヴルの考察した問題圏は、1950～80 年代のフランスという背景を多分に背負ったものであった。それは最近の情報化を通してのグローバリゼーションに則して都市や空間を語ろうとする空間論的転回の対象とは、一見したところ捉えようとするものが異なる。しかし両者の間には同一の問題圏として捉えられるものもある。それらには第二次大戦後の大量消費文化の到来にともなう観光都市の形成や、工業団地の延長上に建設される新都市、さらに前近代では確固として分割されていた都市と農村の境界が先進国における国土の総都市化を経て、最終的に消滅してしまった経緯などがあげられる。これらの背景から彼がひきだしたもののが「空間の生産」という概念であった。彼はこの概念により、空間が全地球規模で、近代資本主義生産様式のプロジェクトに則り生産された状況を描き出した。そこでは手つかずの自然が残ると目される空間についても、観光資源や近代資本主義生産様式の飛び地であると表象され、資本にとって常に意味な（たとえ不毛の地であろうとも「辺境」という性格付けから、何らかの資源を引き出しうる）目的であり対象 (objet) となったことが暴露された。よってルフェーヴルの空間論と最近の空間論的転回という思想傾向がともに空間を重点化するのは、一見したところの対象の違いを超えて伏流する、近代資本主義生産様式のプロジェクトの強力さであると考えられる。

しかし様々に存在する既存の知的枠組みは、果たして空間を取り扱わなかったのであろうか。これまで空間に特化して行われてきた地理学や地域研究などの取り組みと、空間論的転回を名乗る研究とはどのように違うのか。これについて、既存の知的枠組みは、空間を単に時間を回収する容器としがちであったことが指摘されよう。さらに、回収される時間とは、近代特有のものとして測られる「時計時間」であった。ここにも近代資本主義生産様式のプロジェクトがどれほど強力であるかが垣間見られよう。

さて、時間-空間という本来は何の特徴付けも持たない延長や拡がりについて、近代世界は時間にたいしては時計時間という单一の「表象」、空間にたいして大は球体としての地球から国民国家、小は個人空間から近代的自我が宿る心的空間なる様々な「表象」をあたえた。本論が注目するのは、この時間にたいしては单一の、空間にたいしては複数のものとしての「表象」が与えられている、近代世界に特有な時間と空間の関係である。そこから近代資本主義のプロジェクトにとり時計時間は、資本主義生産様式の全地球空間の席卷という目的=対象のための手段であったことを論じる。

本論では以下の三点から空間論的転回を考察する。第一に、現代社会において空間とは、近代資本主義生産様式により生産されたものであること。第二に、時計時間は空間を生産するさいに手段としての役割を担うこと。第三に、人々の空間にたいする認識も、空間が生産されるのと同様に生産されているということ。本論は、以上三点についての説明を行うと同時に、この三つのものがなぜ空間論的転回を特徴付ける大きな要因であるかを論じる。それにより、以上三点についてのルフェーヴルの考察と昨今の空間論的転回に通底する近代資本主義生産様式のプロジェクトと空間の関係を検討する。

2. 空間の生産と不均等発展

ルフェーヴルは現代世界における空間の問題を捉える契機として、不均等発展をあげる。不均等発展とは、空間ごとの資本主義発展における程度の違いとして体現される。彼はこうした不均等発展が、予め決定された近代資本主義生産様式のプロジェクトに沿ったものであることを論じた。よって空間とはそのプロジェクトが反映される「容器」であり、当初からその役割が決定されているとする。このことにより、空間がきわめてこのプロジェクトに適合的な形態をとる、道具的に創られた建造環境であるこ

とを明らかにする。

批判地理学の昨今の動向も、こうした不均等発展を理論的に考察し、空間分析に適用している。それらには D. ハーヴェイ、E. ソジャ、D. グレゴリー、R. シールズなどの研究があげられる。これらの著名な研究者の手による研究のなかでは、ルフェーヴルの手法は多大な示唆を与えるものであるとして特筆されている。

例えばハーヴェイ (Harvey 1985) は、都市空間の形成への経済的な影響を分析する。資本主義生産様式は絶えざる過剰生産に起因する恐慌の危機を回避するために、常に空間を拡大再生産する必要があるとする。彼は都市空間が経済的余剰を生産すると同時に吸収する機能を、資本主義生産様式の全段階において保持し続けてきていることに注目する。彼はそのことをルフェーヴルから引き出し、近代資本主義の全過程に通底する都市過程を研究することは、特定の生産様式を研究することより、近代資本主義生産様式の一般的特徴を明らかにするものであるとする。さらに、経済的余剰の集積地である都市同士のあいだで行われる都市間競争は、より都市度の低い後背地を形成するために基本的なものであり、それにより空間は一般的な資本主義生産とともに拡大再生産される。それゆえにハーヴェイ (Harvey 1985=1991: 298-306) は、資本主義がグローバル化するためには、消費や労働力のみならず、全地球規模で空間を不均等に生産しなければならなかつたことを指摘する。

ソジャ (Soja 1989: 173) は、時間に強く依拠した従来の存在論には空間が不在であるという指摘を行う。彼はポスト・フォーディズムのフレキシブルな資本集積が行われる世界では、不均等発展はさらに顕著になることに注目する。すなわち、空間を資本集積が効率良く行われるように組織化することで、様々な領域 (region) が形成されている。それら領域は資本生産にとって有意義であるが、その領域内の人々は空間にたいし資本生産の効率性以上の意味づけを見いだせない。それゆえに資本生産様式により表象される空間の物質性のほかに、何らのかの空間表象を見いだし難くなる。そこではむき出しの物質性に基づく不均等性が顕在化するというわけである¹¹。

さらにソジャ (Soja 1996: 77) は、従来の空間に関する研究が、資本のプロジェクトによって様々に形成された領域について、所与のものとしてきたと告発する。それらの研究は、たとえ階級分析や生産力の歴史的発展との関連で空間をとらえたとしても、あくまで空間へのそれらの反映を見るだけであったとする。よって不均等発展をそれらの研究は指摘したとしても、単に空間にとり外生的な説明因子である階級や生産力へ、空間を従属させているに過ぎないことになる。換言すれば、資本主義の発展段階という歴史過程に沿い、社会関係の一側面である生産関係を記述してきたという訳である。しかしこうした研究では、生産関係が空間を基盤にして形成され、資本のプロジェクトにとり空間を組織することが肝要な問題であり続けていることを描けない。それゆえに、彼は従来の研究がとりあげてきた歴史性 (historicality) と社会性 (sociality) に加え空間性 (spatiality) を強調し、前二者への後者の還元を批判する。

これら批判地理学の研究は、一般的にはポストモダンといいあらわされている時代状況に何らかの姿勢で対応し、それを分析してきている。一般にポストモダンという時代状況は、グランド・セオリーや歴史の終焉への言及や、単線的な時間進行への批判を通して記述される。これら批判地理学を掲げる人々も、こうした批判に基本的には同調している。しかし彼らの大きな特徴に、ポストモダンとはある資本生産様式の発展段階に特徴的な文化様式であるということが強く意識されていることがあげられる。

彼らはポストモダンの特徴として、文化生産が徹底的に資本主義生産様式により統制されてしまい、モダニズムが標榜した予測不可能な新しさを創造することがきわめて難しくなっていることを指摘する。さらに彼らは、モダニズムがあくまで保持しようとした美的領域の分化と自立性が侵食され、常に陳腐化してしまう状況への、物質的な根拠を求める。彼らがその物質的根拠としたのが、文化生産をつかさどる資本主義の全世界化である。従来なら局所的に行われる美的活動が、急激かつ世界的に消費されてしまい、それにより美的形式の新しさが、瞬く間にその創造性を失う。しかし文化生産に浸透した資本主義は、さらなる拡大再生産を行うため、美的形式の新しさを偽装しなくてはならない。そのため常に文化的遅滞という不均等発展の別のあらわれを空間に投射する²⁾。それらは不動産投資や観光資源として非常に有効な表象を作り出す。

建築や都市計画は、他の様々な美的生産活動にくらべ、より多くの資本が必要となることになる。そのことからも建築や都市計画への表象が、以上のような文化生産への資本のプロジェクトが行う操作的な性格を強く担うことになる。そしてそれらを消費する人々も、それらを購買することが自らの生活の必要性ゆえに不可欠であり、購入にかける資本が他の文化的生産物より比較的高いということから、それら表象を結晶化する傾向を持つ。ここにも空間を生産することが近代資本主義のプロジェクトにとり、非常に重要になっている契機が見いだせる³⁾。

さらに F. ジェイムソンのポストモダニティ分析では、スペクタクル化による新しさの偽装が徹底的に露見してしまうことが、ポストモダニティの文化的論理であるとされる。ポストモダニティと診断される現代世界では、モダニティが時間の流れに沿って構成してきた物語が総じてシュミラーグル (simulacra) であることが露見する。そうなると時間の流れを表象する時計時間も、仮構的であるという性格を露呈せざるを得ない。よって何らかの「新しさ」を担って生まれてきたものは、不可逆な時間軸の延長上にあるものとは見なされなくなる。「新しさ」は単なる差異となり、時間の不可逆な進展を表象するものではなくなる。さらに新しさと古さが発展の不均等性に起因すると考えることが出来なくなり、それらは空間上に差異として表象されるに過ぎなくなる。しかし何らかの「新しさ」に含まれる時間的特性を見いだそうとするのであるなら、必然的に空間をたよりにするしかなくなるのである。ジェイムソン (Jameson 1991: 311) はこの点から、「不均等」な空間への注視の嚆矢となったルフェーヴルを高く評価する。

以上、先述の第一の点、現代社会において空間とは、近代資本主義生産様式により生産されたものであることを論じてきた。それはポストモダニティと称される文化様式を捉えようとする、非常に鋭敏化された現代世界へのまなざしにおいても、空間が時間よりも優越化されていることが分析の出発点であることからもうかがい知れよう。

3. 時計時間の操作的性質

近代資本主義のプロジェクトは、空間に不均等発展を投射する。そしてこの不均等発展は、時計時間を手段にすることで可能となった。それは、空間と時間というそれぞれ切り離しては考察することのできない二つのもののうち、現代世界では時間のほうに、多くの技術的な革新の恩恵を与えたと考えられることからも明らかである。ルフェーヴルは人々の空間認識に限界を定め、その限界の外にはあたかも何もないとするために、このプロジェクトが用いた手段のなかで、時計時間は特に中心的なものであることを語る (Lefebvre 1974=2000: 159, 198)。そのことは資本労働を科学的に管理する方法が、時間を

制御することにあることからも理解されよう。

先にも述べた通り、時間・空間の双方とも、何らかの表象をともなわない限り、何の特徴もない拡がりや延長でしかない。近代社会は時計時間という单一かつ連続的な表象を採用した。さらにそれを「時計」という技術により実体化し、全世界に普遍化させることで、空間に時計時間を埋め込ませた。

時計時間は獲得された空間を編成する手段であり、目的ではない。なぜなら、時間を短縮したり速度を速めたりすること自体が目的となることは、交通手段の生産などでは考えられる。しかし、それら交通手段は何らかの生産物や生産手段を運搬・伝達する手段であっても目的ではない。より効率性のよい生産のためには、時間管理や速度の増加の他にも手段はあるのだ。資本のプロジェクトにとり目的となるのは、より貫徹した空間の占有なのである。その占有を通して、空間は生産・再生産され、その結果として不均等発展は資本の戦略に適合するように形成されることになった。そして人々は空間を媒介した時計時間が、空間編成ならびに労働の調整手段であると意識するより、実体的なものであると思いつく可能性が強くなる⁴⁾。そのことは、一見したところ時間による拘束性を度外視しているように思われる深夜労働や時間外労働ほど、時計時間による調整を受けることになることからも明らかであろう。

さらに時計時間は、空間が現代世界の主要な目的であることをも隠蔽する。調整を受けて区割りされ、そこに何らかの表象をあてがわれた空間は、その後は時間をひたすら回収していく容器となる。具体的には、時計時間の普遍化された後に国境線が引かれた近代国民国家が、時計時間に基づいた「歴史」を作り出し、それを時計時間が敷かれる近代以前にまで敷衍していくナショナリズムの典型的な形成過程などがあげられよう。獲得されたある空間的範域の正当性を求めるために時計時間が持ち出され、さらに時計時間が他の時間表象を持たないかのように振る舞う。しかし、近代資本主義の活動は、時計時間を世界中に設定することを目的としたのではない。あくまでも、全世界の空間的席巻を優先的な目的としたのである⁵⁾。

ルフェーヴル (Lefebvre 1974=2000: 166-168) は、こうした近代資本主義の時間と空間の関係の性質をもっとも集約したのが現代都市であると考えた。それは前章でのハーヴェイへの言及で述べた通りである。彼はさらに、不均等発展が資本のプロジェクトであることを告発するに留まらない。そのプロジェクトはさまざまな空間生産の様式をとり、ある生産様式の発展段階に特有な不均等発展の様相を形成することも指摘する。それでは現代世界に特有な空間生産の様式とは何か。ルフェーヴルの（都市）空間論を援用する批判地理学の傾向から考察してみる。

批判地理学が対象とした都市空間は、グローバリゼーションや情報化という文脈におかれたものである。ロサンゼルスのダウンタウン地区、東京の臨海副都心、ロンドンのドッグ・ランド、パリのデファンスなどの、グローバリゼーションや情報化をもっとも反映させた空間は、それぞれの建造環境としては非常に似かよっている。さらにそれぞれの都市は、グローバル・ネットワークにより昼夜を問わず、つまり時間を超えて共時的に活動を調整しあっている。グローバル・シティとは、近代資本主義のプロジェクトが徹底された建造環境である⁶⁾。

グローバル・シティは、その機能を当初から意図された上で建設されたものである。そしてこれらの地区を取り巻く建設計画外の地区との差異は、当初から意図されている。時間は空間占有のための手段であると考えれば、不均等発展とは時計時間を、ある範域を持った空間の中に回収させた結果であると考えられよう。しかし比較的短時間で形成されたグローバル・シティは、時計時間の経過から考えられる量としては、それほど多くの時計時間を回収したとは考えられない。ここにも資本のプロジェクトに

する時計時間の操作性がうかがわれる。空間が回収しなくてはならなかったものは資本なのである。資本が時計時間という表象を用いることで、グローバル・シティの全地球規模での時間調整は可能となる。まさに「時は金なり」なのである⁷⁾。

こうして時計時間の表象をまとい投下される資本は、その回収を行う容器として空間に投下された量が多ければ多いほど、そこで時間・空間に関する実体性の度合いを低下させ、仮構性を強める。しかしグローバル・シティでは、時計時間の操作性は空間の圧倒的な実体性により見失われがちとなる⁸⁾。よって近代資本主義のプロジェクトが徹底化すればするほど、空間から時間を見いだすことが困難になる。しかし依然として、空間は時計時間に刻印され続けている。情報技術が仮構する世界は、共時性の感覚を強め、空間の拡がりをますます圧縮するかのようである。しかし、それぞれが建造環境としては似通い均質であるかのようなグローバル・シティは、それぞれの地名が冠せられているとおり、空間表象の複数性を保っている。共時的世界のまっただ中で、共時的仮構世界に徹底的に浸透され尽くされた人々にとり、グローバル・シティは、単一の時間表象に派生する複数の空間表象を通して経験される。こうした仮想世界 (virtual reality) での経験においては、より身体性に根付いた現実感覚から乖離・疎外されていることを指摘することが困難となっている。何故なら身体感覚自体が仮想性を強めてきているからである。身体感覚による経験を手がかりにしては、現実の仮構性を指摘することも、時計時間に統制された共時性を見いだすことも出来ない。このことからも、時間表象の単一性と空間表象の複数性とは、私たちの時代診断にとり重要な契機となることが明らかである。

次章では、ルフェーヴルが取り出した「日常生活」という対象から、人々の時間-空間に対する認識を探ってみる。それにより近代資本主義のプロジェクトに規定された認識を相対化する可能性を探る。それにより、仮想的な現実と身体性に近接した現実の双方が混在する、現代世界における空間経験についての分析の切り口を提案する。

4. 空間論的転回と日常生活

現代社会において空間とは、近代資本主義生産様式により生産されたものであるという第一点目の説明の最後に、ポストモダン分析における時間意識との関連性を多少述べてきた。この点については第三点、すなわち現代社会における空間と、人々の空間に対する認識が、近代資本主義生産様式により生産されたものであることを説明することにより、本・次章で掘り下げてみる。さらにそれを、前章の最後に語った「日常生活」という対象から、人々の時間-空間に対する認識を探るという論点と絡み合わせてみる。

こうした考察をすることの根拠は、昨今の日本におけるルフェーヴルの再読や空間論的転回を唱える傾向にある。事実、ルフェーヴルの空間論についての日本における先行研究は、ルフェーヴルの一連の「日常生活批判」の文脈へいかに接合させるかに腐心するものであった。たとえば斎藤・岩永の市民社会・物象化文明・レギュラシオン理論からの近代都市への分析 (斎藤・岩永 1996) では、G. ドゥボールが指摘するようなスペクタクル化された社会として近代都市を取り上げる。ドゥボールなどのシチュアシオニストが批判する、生きられた経験を徹底的に排除するスペクタクル化された社会を、ルフェーヴルが批判した現代世界における日常性 (le quotidien) と重ね合わせ、「空間の生産が都市への権利であることを都市住民に再認識させる」(斎藤・岩永 1996: 80) という方向付けを行う。それにより空間へのまなざしは、日常生活の捉え返しという意味づけが与えられる。この意味でシチュアシオニストのス

ローガンである「状況の構築」が、M. ポスターの論じるノマド的な主体や、G. ドゥルーズ・F. ガタリが描き出すリゾーム状の存在へと読みかえられている。彼らは世界のスペクタクル化が強められていることを認識しつつも、生きられたもの (vécu) を奪われた日常性からのさまざまな出口が模索されている。

上野 (上野 1999) は、斎藤・岩永の読解をより空間論的転回に則したかたちで論じている。そこでは空間論的転回が「ディシプリンの拘束と営みを解きほぐすような学問のあり方」(上野 1999: 74) として性格付けられている。それゆえにソジャやハーヴェイの議論そのものが従来のディシプリンの枠を飛び出し、文化研究・ポストモダン分析・フェミニズムなどとの接合を図っているということのみならず、彼らのルフェーヴル読解自体が従来の硬直的な唯物論・弁証法の用法を避けていると指摘される。さらに空間論的転回は実体上における都市や農村の空間の変容という、近代資本主義のプロジェクトが直接的に操作するということに留まらず、思考自体がその認識枠組みを作る・作らないという図式化の問題で、空間的なものであるとする (上野 1999: 75)。こうして上野はスペクタクル化された日常生活を打ち破るシチュアシオニストの実践が失敗していることを認識しながらも、それをいかに発展解消させるかを模索する。そのことによりルフェーヴル読解に拡がりを持たせると同時に、日常生活の些末さに理論を還元することを避ける (上野 1999: 79)。ここでも現代世界における日常生活が、空間論的転回の要石とされている。

吉原 (1994) はルフェーヴル再読の火付け役であり、その都市社会学出自ゆえの空間にたいする実体的な意識に富んだ問題圈を提出している。彼は実体的な都市・空間研究をする立場からルフェーヴルの理論を検討する論者たちを広く議論の俎上にのせる。さらに、構造主義マルクス主義との対決を経た文脈でルフェーヴルの『空間の生産』が詳細に検討される。さらには『空間の生産』以後の国家と日常生活の関係へも言及される。こうした論理展開はルフェーヴルが自らの弁証法理解によせた解釈、すなわち時間の不可塑な流れに弁証法の展開を委ねることのない「空間の弁証法」を全面化させるためであった (吉原 1994: 139)。

こうしてみると、空間論的転回とは、実体上の空間にたいする近代資本主義プロジェクトの介入という論点に留まるものではなく、ある時間・空間認識の中で営まれる日常生活の批判的な把握という目的をも担うものであることが理解されよう。次章では、よりルフェーヴルの一連の『日常生活批判』に沿った形で、第三の点についての説明を試みる。

5. 日常生活と余剰

日常生活とはある時間・空間認識の中で営まれる⁹⁾。現代世界における日常生活とは、ルフェーヴルにとって批判的対象であった。彼にとり現代世界とは、様々な近代資本主義のプロジェクトがもたらした技術・建造環境により、日々の活動の中から生きられたものを奪われルーティン化した「日常性」が蔓延したものであると特性描写される (Lefebvre 1962=1969: 153-156)。人々の生産活動は、時計時間により複合的に組織・制御され、そこには近代特有の時間・空間の編成様式がかかわることは前章までで見てきた通りである。現代世界における日常生活とは、近代以降に特有な時間・空間への認識枠組みと結びついている。

ルフェーヴルは日常生活に余剰という特徴付けをし、それにより革新性を潜在的に担わされたものとする。日常生活の余剰としての性質は、具体的には生産・労働活動を離れた経験や余暇などが思いつくところであろう。彼が日常生活に余剰としての特徴を与える意図は、そこに概念を超えた、すなわち思

惟されたものに留まらない経験上の意味を含み込ますためである。しかし現代世界における日常生活とは、生きられたものを奪われ、ルーティンに埋没させられた日常性に席巻されている。

現代世界における日常性の一つのあらわれは、人々による大量消費と彼らの様々な欲求をみたす大量生産の上に組織・制御された「消費社会」である。消費社会の組織・制御には、流通という契機を通して、より多くの時計時間がかかる。そこでは、生産物と消費財の製造業者たちが消費者をも、時計時間に順応的に製造してしまう。余暇についても、人々は余暇活動と余暇時間の消費者へと製造される。人々の意識は商品の世界へと外化・物象化され、規定付けられた欲望に従う消費者とされる。宣伝広告はその具体的な戦略である¹⁰⁾。そこでは余剰のもつ革新性は見いだされ難い。

消費者として日常性に埋没した人々は、常に商品を媒介する認識のフィルターを通して様々な経験をする。それゆえに、資本の媒介を免れた純粋な認識を想定することは不可能である。こうした認識についてルフェーヴル (Lefebvre 1962=1970: 20) は一方向的なもの (unilatéralité) と特性描写する。この認識の一方向性とは資本のプロジェクトの手段である時計時間の性質そのものである。

日常性における認識は一方向的なものとして体現される。ルフェーヴルはこうして複合的に拘束され日常性におとしめられた日常生活に、それでもなお余剰としての意味を持たせる。その根拠は何かといえば、それが経験的・実践的なものであるとする。この経験的・実践的なものを語るために、ルフェーヴルは弁証法を導入する。彼によれば、認識の一方向性とは疎外のことである。彼にとり疎外は経済的ななるものに還元されない。さらに疎外は、可能な非疎外化への運動によって考えなくてはならないとする。そして非疎外化も、実現された疎外、もしくは現在において論理的に帰納されるところの疎外との関連において、考えられるものとされる¹¹⁾。

ルフェーヴルにとり、この疎外-非疎外の関連は、現実性のなかに社会の全体性 (totalité) を認識するさいに肝要となる。彼は、現実性 (réalité) を「現在/現実的なもの」(le présent) と「現動的なもの」(l'actuel) に区別する (Lefebvre 1962=1969: 204)。現実的なものは、弁証法上の対立が分析され、現実的な諸問題 (諸矛盾) が現前する「今現在」という瞬間である¹²⁾。

わたしたちは、現実的なものにおいて「形式」として認識を獲得する。それは一方向的なものという性格を担わされたものである。認識としての形式から出発する分析により内容に到達する。形式はどれほど抽象度を高めようと、幾ばくかの内容を持つ。それは理論家や形式の洗練を求める人々が、より多くの具体的な内容を形式や理論へと盛り込もうとすることからも理解できよう。盛り込まれた具体的な内容が誤謬であったとしても、誤謬という内容をもつ。内容をもたない純粋形式はない。前章まで考察してきた近代世界特有の時間-空間認識はここにかかわる。

どれほど時計時間により物象化された時間認識であろうと、そのイデオロギー性を見いだす根拠は、時計時間に支配された現実的なものとしての日常性にある。時計時間は現代世界における单一で特権的な形式である。私たちの様々な営為がなされる空間とは、時計時間に分節された物象化された形式であり表象である。しかし空間は時計時間に生産された表象でありつつも、その表象が複数であるというところに、時間との決定的な違いがある。つけ加え、空間は生産された形式であり表象であるが、つねにその生産・再生産がそこで営まれる日々の営為に依存せざるをえないという特徴を持つ。

時計時間は無人の地や海の上でも適用可能であるし、時計時間以外の表象が生まれない限り、その表象が変更されることはない。しかし空間に関しては、無人の地や何の航路にもなっていない海上にひとたび資源が発見されるや、様々な表象を帯びることになる。開発をプロジェクトする資本や領有権を主

張する政治的なものが、様々な表象をあてがい、空間に意味を与えるための区画を施す。

こうした空間の特徴を描き出すために、ルフェーヴルは疎外の駆動的役割と具体的抽象 (abstraction concrète) を提出する。今一度、彼の弁証法に則してこのことを見てみよう。形式が内容を喪失しないためには、内容と形式はつねに弁証法的な対立に則し、両者の間にある何らかの空隙を、漸近的に埋めていかねばならない (Lefebvre 1947→1958=1961: 121)。そして空間のもつ表象の多様性と、その表象を支える日々の営為という内容は、空間表象の複数性から見ても、つねに弁証法的な過程である。この漸近性を担保するためにルフェーヴルは現動的なものを現実的なものと区別した。そして現動的なものは現実的なものに潜在する。

個々人の認識が一方向的なものとして疎外されていることは、認識が欠損を帯びていることを示す。その欠損とは、ある何らかの潜在性として社会の全体性を指定するがゆえに欠けたものであると認知される。このことから認識は全体性とのかかわりの中で、何らかの微量の真実を含むことになる。こうした真実とは、潜在的な全体性を想定すれば、相対的なものである。しかし相対的なものでありつつ、一方向的なものとしての認識にまつわる物象化の契機のため、絶対的なものとして客觀性を含むことになる。この絶対的なものとしての客觀性は物象化された認識である。しかしルフェーヴルはこの物象化された認識が歴史的に達成され、現実的なものとして体現していることに注目する。

潜在性を含み込んだ現動的なものを語ることは、認識を完全に相対化することなく、時間の継起上の各瞬間ににおける認識の歴史的性格を示すことを可能にする。よって現動的なものを導入することは、ルフェーヴルの論理の中に時間が展開することを可能にする。それにより絶対的な客觀性=物象化された認識を歴史的なものとして確定するのは、継起する時間の進行（時計時間ではない）であることが明らかになる。時間の継起は、認識のイデオロギー性を歴史的事実として露見させる。そして潜在性として想定される全体性とは、時間の進行の後に見いだされるか、時間の進行へと向けて投企されるものとなる。

認識は現実的なもののなかでは、生きた具体的なものであるが、全体性を想定することにより相対的なものとして導き出される。しかし全体性を想定することは、時間の進行の後においてのみ可能なのである。よって全体性とは歴史的事実ではなく、時間の進行を操作し觀念上で拵えたものである。私たちにとって全体性とは觀念である。もし全体性がいかなる様態においても、時間の進行に潜在するものであるなら、それは歴史化し、社会的に完全に特殊化して考えなければならない (Lefebvre 1947→1958=1961: 103)。

以上が弁証法から導出され、ルフェーヴルの著作の中に散見するものの、体系的には語られなかった「遡及的-漸進的方法」(le méthode régressive-progressive) である (Lefebvre 1974=2000: 117)。それは現実的なもの、すなわち「今、ここ」を認識の出発点として、対象への考究を歴史的に往復することにより、現実的なものにおける潜在性を見極めようとする方法である¹³⁾。よって潜在性とは、現実的なもののなかでは全体性であるが、現動的なもののなかでは全体化 (totalisation) という別の概念により区別される (Lefebvre 1962=1970: 9)¹⁴⁾。全体化を導入し、疎外された認識に歴史を駆動する可能性を見いだす。

弁証法と遡及的-漸進的方法は、常に何等かの全体的なものを漸近的に把握しようとするがゆえに、そこにはこぼれ落ちるものがあることを前提としている。それゆえに弁証法的思考とは一種の了解不可能性を含むものである。それは現実的なものにおいては漸近的に埋めてゆかねばならない不可能的な

ものである。そして未来において可能的なるものとして、潜在性に投企される。よって日常生活とは、現実的なるものにおいては欠損として、現動的なるものにおいては欠損における充実としてあらわれるものである。この欠損こそ空間表象の複数性と、余剰としての日常生活の関係に注目することで、近代の時間-空間認識を探り出す出発点ともなる。ここに、空間とは日常生活にとり具体的抽象であることの意味が現れる。すなわち、複数の表象をあてがわれた空間は抽象であるが、日常生活の捉え返しを試みる空間論的転回の文脈では具体的なるものとなる。よって第三のものとしてあげた、現代社会における空間と人々の空間に対する認識が近代資本主義生産様式により生産されたものであるという論点は、日常生活の批判的把握の基礎となるものである。本論はここに空間論と日常生活批判の接点を置く¹⁵⁾。

6. 結 論

以上、時間表象の單一性と空間表象の複数性を巡り、不均等発展、時計時間の操作的性質、具体的抽象としての空間を論じてきた。ここでは、日常生活の批判的把握と空間論の関係を、G. ドゥボールの現代社会批判と比較することで、その意義を再確認し、本論を閉じたいと思う。

ドゥボールの現代社会批判は、その主著の題名通り、スペクタクル化された社会への批判を通して行われた。スペクタクル化した社会とは、資本それ自体の増幅が目的化され、その目的にスペクタクル、すなわち視覚化されたものが供され、視覚化されたもの外には何もないとされる社会である。視覚の外に何もなしとされる、この過度に即物化されて描かれる社会では、視覚化された表象が交換価値を代表することになり、商品物象化の原理が完全に社会生活を占領することとなる (Debord 1967=2003; 36)。さらに、スペクタクルは世界の時間と空間を人々にとって疎遠な形態で表象するに至る (Debord 1967=2003; 29)。

こうしてドゥボールの語るスペクタクル化された社会とは、時間・空間とともに視覚を介して「置き換え」られた世界であるということになる。すなわち「感覚しうる世界は、感覚を超えたところに存在すると同時に優れて感覚可能なものとして自分を承認させた選りすぐりのイメージに置き換えられる」のである (Debord 1967=2003; 29)。このように彼は、視覚に忠実なものへと「置き換え」られた世界での「感覚」の不確かさを、視覚の陥穽という点から批判する。

彼が語る視覚を介して「置き換え」られた世界とは、視覚の機能がきわめて空間分節に関わることを鑑みれば、近代資本主義の操作が身体感覚にまで及んでいることの証左と見ることが可能であろう。しかし彼の論のなかには「感覚しうる」世界と「感覚を超えたところに存在する」世界を分かつ根拠がないのである。第三章の終わりで見た通り、身体性に根付いた現実感覚を頼りにすることは、今日のより仮想性を深めた世界においては困難なのである。

本論が扱った時間表象の單一性と空間表象の複数性という論点は、仮想性を強めた日常生活を批判的に把握するための、あくまでも契機であり基礎となるものに過ぎない。しかしこの論点から考察することにより、認識の出発点は「今、ここ」となる。第二章の終わりで見たとおり、時計時間の単線的な流れ 자체がシムラーカルと化している「今、ここ」を「新しさ」からの疎外と考えることで、かつて存在したかもしれないし今も存在するかもしれない「身体感覚」との曖昧な距離を前提とすることも、何らかの価値付与をすることもなくなる。必要とされるものは「今、ここ」にある意味の希薄さ（例えば「新しい」という言説）を指摘することなのである。よって、本論で論じられてきた「空間論的転回」とは、「今、ここ」を意味の希薄さの中で捉え直すための、一つの方法論上の提起であると言えよう¹⁶⁾。

注

- 1) しかしソジャ (Soja 1989: 152) は領域性を逆手に取り、資本の空間への戦略により局部化しつつも遍在することとなる結節性 (nodality) を注視することで、新たな空間認識の根源となると考えられる場所性 (locality) を見いだすことを提倡する。その最終的な根拠を、私たち自らの身体という空間が、最終的に分断ができないことに置く。
- 2) こうした経済的なるものと美的なるものの共犯関係について S. ラッシュ (Lash 1990=1997: 18-24) は、ポスト・モダナイゼーションとは脱分化の過程であると指摘する。ポスト・モダナイゼーションの過程では美的なるものは、モダニズムが対象とした表象とは異なり、資本が貫徹したリアリティを文化的な生産物として対象化すると指摘する。
- 3) この点については P. アンダーソン (Anderson 1996=2002: 157-183) による絵画形式とその他の芸術形式との比較が示唆的であろう。
- 4) L. マンフォード (Mumford 1934=1972: 28) も語る通り、時計とは「その産物が分や秒である動力機械の一つでもある。そしてその本質的な性質によって、時間を人間的事象から分離し、数学的に計測可能な系列という独立した世界、つまり特別な科学の世界への信念を作り出すのを助けた」のである。
- 5) 資本主義と時計時間の共犯関係についての例証は、B. アンダーソン (Anderson 1983→1991=1987→1997: 107) の出版資本主義についての研究にも見られる。出版資本主義の拡大と旧スペイン領アメリカの独立後の国境形成要因について、『想像の共同体』では本国と植民地との航程や、新聞について指摘される。
- 6) その他にもグローバル・シティは、国民国家の相対的な地位低下に則して考えられている。多国籍企業の国境横断的な活動、労働人口の国境横断的な移動、その結果としての国家の国境内部での統治機能の侵食や国民国家のアイデンティティの希薄化などが述べられる。さらには、多国籍企業や国際的労働人口のハブ（拠点）となる、情報ネットワークや労働市場の結節点が、国民国家の内部や国家間の調整機能をある程度肩代わりしてしまう事態が分析されている (Sassen 1996=1999)。
- 7) 近代資本主義精神の中では、時間が一つの商品となったことに関しては、ゼルバベル (Zerubavel 1981=1984: 57-118) のスケジュールについての言及を参照。
- 8) D. グレゴリー (Gregory 1994: 76) によれば、以上のような実体性の喪失を、地図とそれが指示対象である空間との対応関係が希薄となっている点から考察する。彼はこのような状態を「地図作製における不安」 (cartographic anxiety) として指摘する。
- 9) ルフェーヴルの『日常生活批判』は、本来は時間-空間論として描かれたものではない。さらに日常生活を規定付ける要因は、近代資本主義プロジェクトによる時間や空間への操作にとどまらず、言語や技術や様々な制度など、多岐にわたる。本論はその中でも時間と空間に則したかたちで、彼の独自の弁証法を読み解くものである。
- 10) ルフェーヴルは以上のような状況を「指導される消費の官僚的社會」 (La société bureaucratique de consommation dirigée) とする。この状況の中では、疎外に対する異議申し立てすらも、文化消費のための上質の製品となる。
- 11) これに関してルフェーヴル (Lefebvre 1962=1970: 45) は以下のように敷衍する。「最悪の疎外は、疎外についての脱意識 non-conscience (非意識 méconscience もしくは非認識 méconnaissance) を伴う。」
- 12) しかしこうした現実的なるものとは、つねに継起する時間を人為的に切断した結果あらわれるものであるため、すでに思考の還元を受けたものである。ここからも全体性を措定するよりも全体化という運動を現動的なものから遡及する必要があらわれる。
- 13) 遷移的-漸進的方法は他の著作では変導法・転繹 (transduction) とされたりもする (Lefebvre 1962=1969-70)。ルフェーヴルはマルクス『経済学批判要項』に、この方法の出自を求める。マルクス主義へと接近したサルトルは『方法の問題』で、この方法を高く評価し、全面的に取り入れている。こうした弁証法理解は、開放型弁証法と特徴づけられる。
- 14) それに対し、日常生活の中で、常に部分的で不完全なある側面として現れる諸形式は、現実的なるものの全体 (ensemble) の諸関係として示され、かつ完成される。
- 15) シールズは、ルフェーヴルの論理展開を支える弁証法それ自体が空間化していることを論じる。彼によれば、通常の弁証法理解で「否定の否定」の項は、時間軸上の進展のなかで止揚されたものとして、肯定-否定の二項とは別の時間上の地位を与えられるが、ルフェーヴルは余剰としての「否定の否定」の項を、諸矛盾が顕現

する現実的なるものに潜在化させているとする。そのため三項は共時化し、時間軸上のある一点に付随する空間上の拡がりにのみ論理が展開する。これを三元論的弁証法であるとする。シールズはここに、ルフェーヴルの弁証法が共時性における拡がりすなわち空間へと向けられた論理上の根拠があり、弁証法の空間化の意味があるとする (Shields 1999; 160)。

- 16) E. ソジャ (Soja 1996: 62-70) の研究は本論でのルフェーヴル理解に、多くの示唆を与えてくれる。「常に他なるものへとなる第三番目になるもの」(thirding-as-Othering) を弁証法における「否定の否定」の項として提出する「第三空間」(Thirdspace) は、ルフェーヴルの語る全体化する潜在性を見事に言い換えたものであるといえよう。この進行形 (-ing) を付された第三項(third) と差異への意志(Other) に、全体化するものへのソジャの腐心を伺いえる。彼の提出する第三空間とは「今、ここ」のうち「ここ」、すなわち空間をいかにして「ここ」として差異化するかというときに、私たちに差異の基準を与えてくれる。ソジャにとってそれは、最も現代性=仮構性を凝縮したとみなされるロサンゼルスやアムステルダムなどの都市空間なのである。

引用文献

- Anderson, Perry, 1996, *The origin of Postmodernity*. Verso. 角田史幸・浅見政江・田中人訳『ポストモダニティの起源』こぶし書房 2002.
- Anderson, Benedict, 1983 [1991], *Imagined Communities*. Verso. 白石さや・白石隆訳『想像の共同体』NTT 出版 1987→1997.
- Debord, Guy, 1967, *La Société du Spectacle*. Buchet-Chastel. 木下誠訳『スペクタクルの社会』平凡社 1993→筑摩書房 2003.
- Gregory, Derek, 1994, *Geographical Imaginations*. Blackwell.
- Harvey, David, 1985, *The urbanization of the capital: Studies in the history and theory of capitalist urbanization*. Johns Hopkins University Press. 水岡不二雄監訳『都市の資本論』青木書店 1991.
- Jameson, Fredric, 1991, *Postmodernism, or, The Cultural Logic of Late Capitalism*. Duke University Press.
- Lash, S. 1990. *A sociology of postmodernism*. Routledge. 田中義久監訳『ポスト・モダニティの社会学』法政大学出版局 1997.
- Lefebvre, Henri, 1958 [1947], *Critique de la vie quotidienne, I: Introduction*, 2^e édn avec avant-propos. L'arche. 田中仁彦訳『日常生活批判序説』現代思潮社 1968.
- Lefebvre, Henri, 1962, *Critique de la vie quotidienne, II: Fondements d'une sociologie de la quotidienneté*. L'arche. 奥山秀美・松原雅典訳『日常生活批判 I・II』現代思潮社 1969-70.
- Lefebvre, Henri, 1968, *La vie quotidienne dans le monde moderne*, Paris: Gallimard. 森本和夫訳『現代世界における日常生活』現代思潮社 1970.
- Lefebvre, Henri, 1974, *La production de l'espace*. Anthropos. 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店 2000.
- Lefebvre, Henri, 1981, *Critique de la vie quotidienne, III: De la modernité au modernisme*. L'arche.
- Mumford, Lewis, 1934, *Technics and Civilization*. Harcourt Brace Jovanovich. 生田勉訳『技術と文明』美術出版社 1972.
- 斎藤日出治・岩永慎治 1996 『都市の美学』平凡社.
- Sassen, Saskia, 1996, *Losing Control? Sovereignty on an age of Globalization*. Colombia University Press. 伊豫谷登志翁訳『グローバリゼーションの時代—国家主権のゆくえ』平凡社 1999.
- Shields, Rob, 1999, *Lefebvre, love and struggle: Spatial dialectics*, London: Routledge.
- Soja, Edward, 1989, *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory*. Verso.
- Soja, Edward, 1996, *Thirdspace: Journey to Los Angeles and Other Real-and-Imagined Places*. Blackwell.
- 上野俊哉 1999 「空間論的転回、その後」『現代思想』27(13): pp. 72-79.
- 吉原直樹 1994 『都市空間の社会理論』東京大学出版会.
- Zerubavel, Eviatar, 1981, *Hidden Rhythms: Schedules and Calendars in Social Life*. University of Chicago Press.
- 木田橋美和子訳『かくれたリズム』サイマル出版会 1984.